異年齢での関りで伸びるもの（園長つぶやき）

０，１歳児クラスの子ども達が、園庭に出て遊ぼうとテラスのふちに座っている時のことです。こちらから、何か発信したわけでもなかったのですが、自然に年長の子ども達が数人やってきて、保育者の横に座り、靴を履かせてくれ始めました。その光景は、本当に違和感なくスムーズで、驚くほど自然でした。

靴を履かせてあげた後は、遊具の場所を指さして教えたり、一緒に手を引いていこうとしたり、履かせるだけでなく遊びまで一緒に行っている子ども達もいました。中には、三輪車に乗せてあげた後、落ちないように上から覆いかぶさるようにしながら押してあげる姿も！つい一カ月前に年長になったばかりの子ども達ですが、日に日に年長者としての意識が大きく育っていると感じ、優しさを見ることが出来た場面でした。

その他、隣にあるグループホームの入居者さんが玄関前に座っており、２歳児クラスの子ども達が自然と顔を見せに行ってくれていたり、児童クラブのお兄ちゃんが持っているトカゲを見せてもらったりと、園の中だけでは完結することが出来ない“異年齢”の交流が見られました。見ていて、良い環境になっていたなと感じるところです。

異年齢での関りは、年長児にすると、思いやりや優しさを知ることのできる機会だと思います。また、自分が年長であることを自覚することで成長する心は目に見えないですが、大きなものです。さらに、年下の子ども達からすると、年長から受けた優しさを知り、ここで過ごすことの安心感になり、年長児に近い年中・年少の子ども達は次にまた自分が返そうとする心が育ちます。それは、様々な部分から見ることが出来、「憧れる」という心が、大きな成長を促します。今日の場面は、まさに異年齢との関りの良い部分がたくさん見られる１日でした！（R2．４．３０）